



特集

中須東原遺跡全面保存方針決定

益田市長

福原 慎太郎

この度、益田市として、中世の湊町「中須東原遺跡」を全面的に保存する方針を決定しました。

この遺跡は、多くの権利者の方々の総意のもとに進められている益田川左岸の土地区画整理事業地内で見つかりました。全面保存に伴う事業計画の変更によって関係権利者の皆様には大変なご迷惑をおかけすることになりますが、今後は市の方針をご理解いただくために十分な説明と丁寧な対応をしてまいります。

さて、この遺跡の取り扱いについては、府内で16回におよぶ会議を重ね、また、市民や専門家の意見もお聞きしながら「千年単位の歴史的判断をする」との思いで熟慮し、最終的に全面保存を決断しました。その理由は以下の5つです。

1. 日本列島における中世港湾遺跡の代表的な事例として極めて高い価値がある
2. 実物があってこそ説得力がある
3. 全国の中で中世の拠点遺跡が揃って残るまちは益田市のみであり、これらが揃ってこそ意味があり、後世に伝える使命がある
4. 益田の豊かな歴史と文化を活かしたまちづくりを推進する象徴にする
5. 益田氏がアジアとの交易で富を築いた拠点を残し、今後、経済等でアジアや世界につながる象徴にする

全面保存と記録保存のいずれの場合も多額の事業費が必要です。遺跡の全面保存には土地買上げが前提となります。国の史跡指定によって国及び県から高額の補助も見込まれます。市の負担額については、今後の事業推進の中で明らかにし、その都度ご説明してまいります。

私達の大きな財産として中須東原遺跡を保存し、将来的に観光や教育等での活用を図ることで市民の誇りと未来への希望、今後の益田市の発展につなげていきたいと考えています。

市民の皆さんより一層のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。



国家的価値の高い 中世の港湾遺跡



なが す ひがしはら いせき
中須東原遺跡って、
どんな遺跡なの??

これが、想像図。
みなど
大きな湊町だったんだ!



文化財課 長澤 調査員

中須東原遺跡は、かつて益田川・高津川河口域に広がっていた潟湖に面して営まれた、面積2万m²におよぶ中世の湊町の跡です。12世紀に成立し、室町時代の15世紀に最も繁栄し、16世紀まで存続しました。

発掘調査によって、港湾施設や町全体を区画する道路、建物の跡などの数多くの遺構が発見されています。

特に、隣接する中須西原遺跡から連続して発見された船着場の礎敷きは、部分的に確認されただけでも合計約100mにおよびます。礎敷きの船着場跡が発見された遺跡は全国に6か所ありますが、これほど明瞭で大規模なものは他に例がありません。

出土した遺物は現在までにコンテナ百箱を超えます。中国、朝鮮、タイやベトナムで焼かれた陶磁器など海外から持ち込まれたもの、盛んに行われていた鍛冶に関するもの、食器や調理具として使われた土器、箸のような当時の日用品などから、中須の湊の交易の様子や、町の人々の生活を想像することができます。

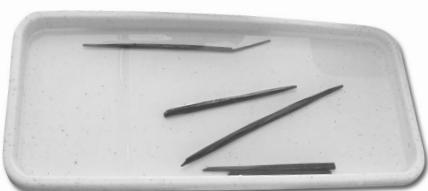
中須東原遺跡はその規模・内容から日本を代表する港湾遺跡と評価され、



わあ～、賑やかだね。
にぎ
外国人の姿もみえるよ！



中須東原遺跡で発見された礫敷き



出土した箸



朝鮮製梅瓶

日本や東アジアの歴史の中でおいろいろな国や地域との交流を考えるうえで極めて重要な遺跡として、全国の研究者から熱い注目を集めています。

潟湖せきこ：大きな入り江の地形

中世せきじ：鎌倉・室町時代

礫敷きれきしき：礫を敷き詰めたスロープ状の面

遺構れきこう：地面に残された痕跡

遺物れいぶつ：昔の人々が使用した道具など

梅瓶めいびん：大名などの限られた人々のみが使

用した高級な酒器



どんなものが 運ばれてきたの？



ひと・もの・情報の交差点

中世には、陸路のほか、船を使った人や物の往来も盛んでした。こうした海や川を利用した流通の接点となっていたのが湊です。

それでは、中須東原遺跡には、どのような物が運び込まれていたのでしょうか。

出土した貿易陶磁器は、ごく限られた人でしか手に入らない貴重な品も含まれていますが、ほとんどは日常の食器として中国や朝鮮半島から運び込まれたものです。備前や常滑など、国内の遠隔地からも陶器が搬入されていました。益田川や高津川上流域からは、木材がいかだ流しで集まり、都茂丸山鉱山の銅や銀、鉄など鉱物資源も川舟を利用して集められていたのかもしれません。

ベトナムの土器も
運び込まれていた
んだね！



ません。海洋領主益田氏が拠点とした中須の湊には、国内外の商人や多様な商品、情報が集まってきたました。

こうして集められた品々は仕分けさ

れ、今度は中須の湊から外へ、また周辺地域に向けて送り出されました。美

辺地域に向けて送り出されました。美

益田家文書と中須の湊の
ちょっとしたお話し

中須益田の研究で重要なのが、東大史料編さん所が所蔵している『益田家文書』をはじめとする豊富な中世文書です。

中須の湊に関する記述が初めて確認されるのは、文永6年（1269年）に書かれた「法橋範政書状案」（益田金吾家文書）です。この文書から「益田本郷津」という湊で、いかだ流しで運ばれてきた材木に税金がかけられていたことがわかります。この益田本郷津は、中須西原・東原遺跡を指すと考えられます。

益田家文書の中の、永和2年（1376年）に書かれた「益田本郷御年貢并田数目録帳」は、益田氏の領地である益田本郷領内の田畠の状況や徴収する税金を記録した台帳です。この文書では、南北朝時代に中須地域が益田本郷領へ組み込まれたことが分かり、中須の湊の重要性が増して、益田氏が直接の管理下に置いたことを読み取ることができます。

益田家文書の中の、永和2年（1376年）に書かれた「益田本郷御年貢并田数目録帳」は、益田氏の領地である益田本郷領内の田畠の状況や徴収する税金を記録した台帳です。この文書では、南北朝時代に中須地域が益田本郷領へ組み込まれたことが分かり、中須の湊の重要性が増して、益田氏が直接の管理下に置いたことを読み取ることができます。



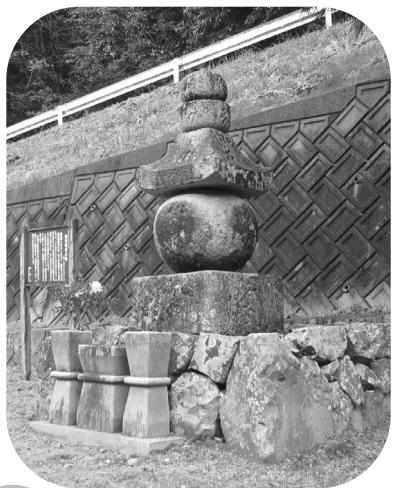
文化財課
佐伯 調査員

中須西原・東原遺跡



中須から周辺へ川を使って荷物を運んだんだよ

石造物が語る 中世益田の交易



伝益田藤兼の墓
五輪塔（七尾町）

益田市には益田氏歴代当主のお墓と伝えられる五輪塔をはじめ、中世の供養塔が150基以上残っています。それらに使用されている御影石の多くは、兵庫県の六甲山で切り出されたものと考えられます。遠隔地から取り寄せるのにかなりの財力が必要になる御影石が、これほど多く運び込まれている地域は滅多にありません。

中須東原遺跡に隣接する福王寺境内にも鎌倉時代の十三重塔が残つていますが、発掘調査でも六甲山の御影石製と思われる五輪塔の一部が見つかりました。遺跡近辺に残る石造物は、交易によって財を蓄えた有力者がいたことを伝えているのかもしれません。

また、兵庫県から瀬戸内海を通つて下関を回る航路で運ばれた御影石は、

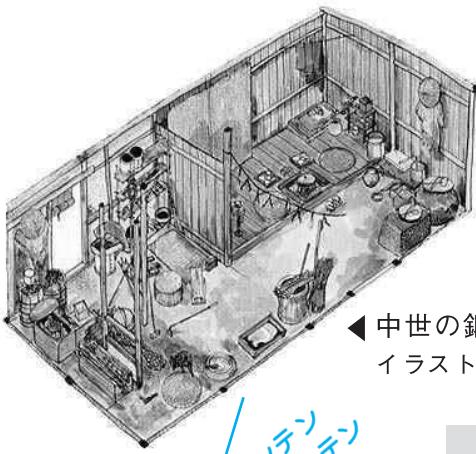
五輪塔：5つの石材を組み合わせた供養塔

荷を下ろして軽くなつた帰りの船を安定させる重しとしての役割も持つていました。御影石製品が益田で多く見つかっているということは、それだけ多くの船が益田へ石材を下ろし、また益田で荷を積んで出港して行つたということです。遺跡から出土した遺物だけでなく、市内に残る文化財も、中須湊の活発な交易を物語っています。

これが、五輪塔の一部（一番下の段）なんだつて！ きっと同じようなお墓がここにあつたんだね！



どんな生活をしていたの？



◀中世の鍛冶工房復元図

イラスト提供：広島県立歴史博物館



鍛冶職人の街



こうやって

刀や釘を作っていたんだね
たくさん的人が生活して
いた街だつたんだ！

名…特定の集団に与えられた田畠のこと
鞴…炉内に風を送る装置
羽口…鞴と炉を結ぶ器具
鉄滓…鉄の不純物の塊
鍛造剥片…鉄を叩いたときに飛び散る、1ミリ前

このように、発掘調査によって発見された遺構と遺物から鍛冶集団の存在が明らかとなり、更に文書の記述からもそれが裏付けられることは極めて重要で珍しいことです。

いたことを表すもので、中須東原遺跡では、これを行つけるように、炉跡や鞴の羽口、鉄滓、鍛造剥片などの鍛冶に関わる多くの遺構・遺物が見つかっています。炉の構造や鉄片などを観察すると、熱した鉄を叩き鍛える「鍛練鍛冶」が行われていたことが分かります。付近では、大小の釘が見つかっており、船の補修も行われていたのかもしれません。



中須なくして 益田の歴史なし

中須東原遺跡の価値は、日本全体の歴史を考える上で中世という時代の基準となる遺跡だということです。

益田川・高津川の河口域には、久城・中須地域を中心として点々と港湾遺跡が並んでいます。その中の沖手遺跡は、道路が整備された大規模な港湾集落で、12世紀にこれだけの町づくりが進んでいる例は全国で他に例がありません。流通拠点だからこそ、町全体が整備されたと考えられます。

中須東原遺跡からは、交易を盛んに行っていた証拠として、「荷札」が出てきました。これが、湊の遺跡で出てきたことは、すごい発見です。何が書かれていたか分かればもっと面白いのですが。

13世紀から14世紀にかけて、益田氏が山間部の仙道から益田本郷へ進出し、中須を領地に組み込んで利権を手中に治め、15世紀には湊を拡張整備しました。そうした中で、列島規模、東アジア規模の交易を行い勢力を伸ばしていくのです。益田氏の「海民（かいみん）」としての性格が、この遺跡によく表れています。

交易による経済力を元に勢力を伸ばした益田氏の歴史は、益田河口域を抜きにして語れないし、ここで行われた列島規模の交易は、世界を変えたんだと言えます。



◀発見された荷札

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構理事

小野 正敏 教授



中世の小宇宙・石見益田

益田川・高津川河口域では、11世紀後半から16世紀にかけて沖手遺跡、中須西原・東原遺跡、今市船着場跡など、潟湖と河川を利用した港湾遺跡が次々と展開しました。また、福王寺は南北朝時代以前から湊と一体的な寺院として交易に深く関わり、境内に残る鎌倉時代後期の石造十三重塔はそのことを裏付ける遺物です。

さらに益田氏の領域の中心地「益田本郷」に目を向ければ、居城である七尾城跡、居館である三宅御土居跡があります。中世豪族の城館がともに良好な状態で残っている例は全国的にみても珍しく、セットで国史跡「益田氏城館跡」に指定されています。染羽天石勝神社、妙義寺、雪舟が作庭したと伝わる庭園が残る医光寺、萬福寺をはじめとする寺社、歴代益田氏の墓などの石造物も、中世益田を語る上で欠かせません。また、城下町の道筋や地割り、当時の地名などいたるところに中世が色濃く残っています。

益田のように、古文書を含めた中世がコンパクトにまとまっている地域は全国でもまれと言われています。奥田元宋・小由女美術館館長の村上勇氏はこの状況を指して「中世の小宇宙・石見益田」と呼びました。ひとつひとつの価値はもちろんのこと、後世の破壊をまぬがれて現在まで残った中世のまとまりとしての価値が、全国に誇ることができる益田の歴史的価値であり、「益田らしさ」といえます。

これからの中世へ、

守り伝えていくために

五百年ほど前の中須は、様々な地域の人・物・情報が行きかう、東アジアに開かれた玄関口でした。

その時代の証人ともいえる遺跡が全般的に残り、私たちの前に姿を現したことは奇跡に近いことです。この奇跡をこれから世代へ受け継いだいくため、益田市は中須東原遺跡の全面保存という方針を決定しました。市民の皆さまの更なるご理解とご協力をお願い申し上げます。



★ 地域の歴史や文化財について知りたい場合は、市文化財課まで問い合わせください。☎ 31-0623